

たねまきアクア

タネマキア
@KCUAとその周辺に広がる
創造活動の現在形

04

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

ZINE

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA とは

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA は、2010 年春、中京区堀川御池に京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴い、その敷地内南側に建てられたギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）内に設立された京都市立芸術大学のサテライトギャラリーです。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所（サイト）を示す「@」を付けたもので、音読するとラテン語の「アクア=水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという大学の理念を表現しています。

当ギャラリー学芸員の企画による特別展のほか、京都市立芸術大学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展など、年間約15本の展覧会を開催しています。そのほか、国内外で活躍するアーティストを講師に迎え、著手アーティスト対象のワークショップや京都市立芸術大学移転整備事業「still moving」の実施、また2016年より拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業「状況のアーキテクチャー」に参画するなど、展覧会だけでなく多岐にわたる活動を実施しています。

COVER PHOTOS:

京都市立芸術大学移転整備事業/
状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト7
「Far Away/So Close: 開かれた共同体」

still moving 2017: 距離へのパトス—far away/so close

2023年、京都市立芸術大学はJR京都市東側エリア、崇仁地域への移転を予定しています。移転整備事業「still moving」は、この移転後の大学のあり方を探る実験的なプロジェクトです。2017年度は、展覧会というフォーマットではなく、日々続いている活動を公開する期間として、元崇仁小学校とその周辺にて2017年9月23日（土・祝）-11月5日（日）（*土日祝のみ）に実施しました。

Photos by Takuya Matsumi

たねまきアクア

04

Contents

- 4-16 **REPORT @KCUA** — ヴィンセント・ムーン × contact Gonzo × 川瀬慈
- 18-19 **REPORT @KCUA** — 「京芸 transmit program 2017」の後に
- 20-23 **REPORT @KCUA** — 「京芸 transmit program 2018」
- 24-25 **SCHEDULE @KCUA 2018.4-2019.3**
- 26-27 **VOICE @KCUA_vol. 4** — 永守伸年「屈折考」
- 28-31 **STUDIO VISIT @KCUA_vol. 4** — 西太志「南区久世のアトリエ」

たねまきアクア

たねまきアクアは、@KCUA とその周辺に広がる創造活動の現在形、
クリエイションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です。
(不定期発行、無料)

状況のアーキテクチャー 2017プロジェクト1

「物質+感覚民族誌」スピノフプログラム

im/pulse: 拡張された領域における

映像実験プロジェクト (仮題)

リサーチプログラム

Vincent Moon × contact

REPORT @

登壇者

ヴァインセント

contact Gonzo (塚原悠也)

川瀬慈 (国立民族学)

2017.12



RT @KCUA

contact Gonzo × Itsushi Kawase

出演者：
ヴィンセント・ムーン
(悠也、松見拓也、三ヶ尻敬悟)
民族学博物館准教授)

2017.12.21

@KCUAでは、「感覚民族誌」的観点からみて優れたアプローチをとる実践や、身体深部の感覚や感性の作用を問う表現に着目した展覧会を次年度に企画しています。そのリサーチプログラムの一環として、出展予定作家であるフランス出身の映像作家ヴィンセント・ムーンと即興的な身体との接触から始まるパフォーマンス・映像・写真などでよく知られるcontact Gonzo、そしてアフリカの音楽文化に関する研究ならびに映像制作に取り組む映像人類学者の川瀬慈によるトークセッションを行いました。「文化人類学・民族誌学」と「アート」という二つの文脈の交差として読み取ることのできる表現を超えた三者三様の活動が紹介され、その後のディスカッションではそれぞれの立場から感じる映像表現とその可能性についての意見交換がなされました。

Photos by Yuki Moriya



1

ヴィンセント・ムーン：

今から10年ほど前にさかのぼりますが、私はミュージシャンたちをパリのストリートに呼んで即興音楽を演奏してもらい、その短編映像を撮りはじめました。様々なミュージシャンの映像を撮りましたが、そのうち音楽業界独特の雰囲気や駆け引きに疲れてしまって、そこから距離をとるために旅をするようになりました。ある日、旅先で訪れたエジプトのカイロで、隠れた場所で行われている神秘的な儀式を体験したんです。それまで自分は、音楽とはミュージシャンがステージ上で演奏し、オーディエンスは対価としてお金やチケット代を払って聴く



2

ものだ、という西洋的な概念で捉えていました。しかしカイロで私が出会った音楽はそれとは全く違うものでした。細い道を歩いていると遠くからドラムの音が聞こえ、その音を頼りにある部屋へたどり着くと、そこでは女性がドラムを演奏していました。そこには観客という概念がなく、その場にいた人たちがみんな演奏者であり参加者であり、みんながトランス状態にありました。その様子を目の当たりにして、今までの自分の音楽に関する考え方が非常に狭いものであったと気づかされました。

以来、音楽はどこからやって来るのか、なぜ人は音楽に魅了されるのかということをずっと考えています。も



3

ちろん一つの答えとして、元々音楽の起源は宗教的なものであり目に見えないものとの関係や、宇宙との調和を求めていたと言えるでしょう。

カイロでの経験がきっかけで、ブラジル、インドネシア、エチオピア、ロシア、ペルーのシャーマンの世界など、世界中の似たような音楽を介した儀式を映像に撮りはじめました。なかでも、ブラジルでのプロジェクトである「Híbridos」は大規模なもので、4年間にわたり蓄積した100作品くらいの短編映像集になっています。この作品では、目に見えないもの、つまりブラジルの精霊たちの音楽への詩的で映画的な探求を試みています。

- 1 Take Away Show #105 _
MUMFORD & SONS
(Paris, Philippe Auguste,
April 2010)
- 2 petites planètes _
volume 6 _ ZAR
(Cairo, Egypt, June 2010)
- 3 HÍBRIDOS ★ BASÍLICA DA
PENHA
(Penha, Rio de Janeiro,
October 2014)

ヴィンセント・ムーン

1979年フランス・パリ生まれ。インディペンデントフィルムメーカー。フランス発の音楽情報サイト La Blogothèque のためにシネマ・ヴェリテの手法（作り手の存在が映画から排除される虚構上のトリックを排し、映像の作り手が被写体の人々と関わる行為そのものをも記録し、映画をより真実に近づけようとする手法）によって制作された作品の数々でその名を知られるようになる。2009年からは遊牧民のごとくカメラひとつで世界を旅し、現地の伝統音楽から宗教的な儀式、新しい実験音楽までを幅広く探求し映像を制作。これらの旅の記録映像は、彼の生涯をかけたノマディック・フィルムメイキングプロジェクトとしてウェブ上で公開され、また世界各地でフィールド録音された音源は、自身のレーベルである Collection Petites Planètes より配信されている。現在、2019年の実施を目指し、日本における魂を震わせる表現を記録する旅、HIBIKIプロジェクトの準備を進めている。
<https://www.vincentmoon.com/>





1

川瀬慈：

2001年から16年間、私は日本とエチオピアを往来して人類学の調査をしています。エチオピアには歌や芸能を生業としている集団がいくつかあり、彼らと共に生活しながら、研究成果を論文と同時に、映像作品をとおして発表してきました。例えば『ラリベロッチー 一終わりなき祝福を生きる一』では、「ラリベラ」あるいは「ラリベロッチ」と呼ばれる芸能集団が家の軒先で歌って人々を祝福し、そのお礼に金品などの報酬をもらう姿をとらえました。いわば門づけのパフォーマンスです。



2

- 1 『精霊の馬 / When Spirits Ride Their Horses』(2012)
エチオピア、ゴンダールの霊媒マレムのポートレート。
- 2 『ラリベロッチー 一終わりなき祝福を生きる一』(2007)
エチオピアを広範に移動して歌うラリベロッチ夫婦の活動。

『ドウドゥイエー 一禁断の夜一』では、性の話題に特化した歌を歌う、女性歌手のパフォーマンスを紹介しています。『When Spirits Ride Their Horses』は、先ほどヴィンセントがカイロで圧倒的な経験を受けたと話した「ザール」という憑依儀礼を記録した作品です。エチオピアやサウジアラビア、イラン、スーダン



に広がっているこの憑依儀礼では、精霊と人のコミュニケーションを繋ぐものとして音楽が重要な働きをします。私の研究や映画制作は、常に歌に導かれるようにして展開してきました。

ヴィンセントとは2011年頃に、パリのブダ・ミュージックのプロデューサー、フランシス・ファルセトの紹介で知り合いました。ヴィンセントはエチオピアに長期滞在し、僕が研究していた音楽集団や憑依儀礼などの撮影もしています。



川瀬慈 (かわせ いつし)

1977年岐阜県生まれ。映像人類学者、国立民族学博物館准教授。

エチオピアの音楽職能者等を対象とした人類学研究に基づき映像作品を制作し、各国の民族誌映画祭で発表。代表的な作品に『ラリペロッチ』『僕らの時代は』『精霊の馬』『Room 11, Ethiopia Hotel』『ザフィマ ニルスタイルのゆくえ』『めぼえる歌 一民謡の伝承と創造』などがある。2012年より Anthro-film Laboratory を共同運営し、様々な分野の表現者、研究者との対話からオーディオビジュアルの話法の開拓に取り組んでおり、近年は日本の他にも、ドイツ、中国、韓国、エチオピアにおいて映像人類学の理論と実践に関する教鞭をとっている。

<http://www.itsushikawase.com/>



Helinski, Finland, 2008

三ヶ尻敬悟 (contact Gonzo) :

contact Gonzoは2006年からハードに体をぶつけ合うようなコンタクト・インプロヴィゼーションの発展版を軸としながらパフォーマンスを中心に活動してきました。

激しくぶつかるというワンアイデアを持って山や森、市街地など国内外の様々な場所を訪れ、そして実際に実行してみる、ということをやっています。体をぶつけ合うだけではなく、坂道からただ単に落ちてみたり、体に

負荷をかけるところから自分たちにどうリアクションが生まれるのかを実験しています。

『Hurricane Thunder 4』は大阪のサイトという、山を切り開いて住宅や街を作っている建築現場で遊んでいた時の映像から構成されています。僕たちはパフォーマンスをするとき必ず固定カメラで撮影するのですが、いつもそれをどう使うかはあまり考えずに映像を撮るようにしてきました。

ある時、ジェコ・シオンボというインドネシア人のダ



MoMA, New York, USA, 2013
Photo By Choy Kafai

ンサーを日本に呼んで、大阪や六甲山に連れ出して一緒に映像作品を作ったことがありました。彼は、若い頃ニューヨークに行ってヒップホップに影響を受けて、自分の村でやっていた動物の真似をするダンスと融合させたアニマル・ポップというダンスを作っていたのですが、彼と共に六甲山の林の中に入り、木々の間を滑車で滑り降りたり、彼が色々教えてくれることを、僕たちが理由や内容をわかっていないまま真似をするという様子を映像におさめて作品を作ったことがありました。



contact Gonzo (コンタクト ゴンゾ)

2006年に塚原悠也と垣尾優により結成されたパフォーマンス集団。「contact Gonzo」とは、70年代のゴンゾ・ジャーナリズムに由来し、グループの名称であると同時に、身体を「接触」させる独自の方法論の名称でもある。街中や公演で即興的なパフォーマンスを繰り広げつつ、映像や写真作品を制作。結成当初からパフォーマンスの記録映像をYouTubeにアップするなど、メディアを活用した活動を展開。また、07年「吉原治良賞記念アートプロジェクト」に参加以降、現代美術の分野でも注目され、多くの国際展や芸術祭などに参加している。13年にはニューヨーク近代美術館 (MoMA) にてパフォーマンスを発表した。現メンバーはNAZE、松見拓也、三ヶ尻敬悟、塚原悠也の4人。パフォーマンス、インスタレーション、マガジンの発行など多岐にわたる活動を展開している。2015年度よりセゾン文化財団シニアフェロー助成として採択。

<http://contactgonzo.blogspot.jp/>

ムーン：

今日、contact Gonzoと川瀬さんの話を聞いて、一番興味深いのは「即興」という共通キーワードですね。映像であっても身体であっても文化人類学であっても、私たちは何かを捉える時に、即興とフリーダムということを考え、そこで必要となるツールについて考えている。私たちは即興するアーティストとしての自由さを持っているのではないのでしょうか。

今日私たちが手にしているデジタルツールは、単に21世紀にインターネットの急速な盛り上がりを表しているだけではなく、社会構造が大きな変換期の最中にあるということをも意味しています。アートやアーティストの視点で捉えると、以前は、映画を撮ろうと思うと大勢のクルーやお金が必要でしたが、今は自分一人が必要最低限のツールだけで自由に作品を作ったり何かを探求したりすることができる。では、そのツールを手にしたアーティストが今何をすべきかという、いわゆるクリエイティブ・インダストリーといわれるゾーンを解体す

ること、あるいはそこから距離をとって、そのインダストリーを資本主義と言ってもいいのですが、もっと原点に回帰することではないでしょうか。そもそもアートやクリエイティブな行為とは何なのかということを考えることが、今の時代のアーティストに課されたミッションなのではないかと思います。デジタルの変革は、アーティストたちがこのミッションを実行することを可能にし、また人と何かを共有するという行為を容易にし、人と人との距離を縮めたのです。

たまたま私のツールは映像ですが、映像をインターフェースにすることで、「今ここにいる (be present)」ということができるようになったと思います。私は絵コンテなどを描かず先入観もないまま現場に行きます。行ってそこで生まれる人との関係性や目についてたこと、聞いたことから何を撮るかが自由に生まれてきて、その瞬間瞬間で判断しながら映像を撮ります。この現実との関係性というのが私にとって「生きている」「今ここにいる」ということです。最初にアイデアがあって「こ



They you, ask the animals / フリクリー、
気配、そして動作についての考察、山口 (2013)

ういうものを撮ります」という映像の撮り方は、リアリティを操作したり編集したりするという行為なので、そうしないために私はカメラを持って現場に飛び込んで出会ったものを撮るようにしています。

塚原悠也 (contact Gonzo) :

僕らも何かを撮りに行こうと言って山に行ったりしますが、一番良い瞬間は、カメラのことを忘れて行為に夢中になっている瞬間ですね。



HIBRIDOS ★ BASÍLICA DA PENHA
(Penha, Rio de Janeiro, October 2014)

ムーン :

私が育った西洋文化というのは、目に見えないものとの関係性というのが濃かったり薄かったり、すごくアンビバレントな関係にある文化です。神秘性を10年間追究し映像を撮っていて気がついたことは、カメラを持っているのは私ですが、決して私がディレクションしているわけではない。カメラを持っている人が森羅万象をコントロールすることはできない。モチーフや物事は常に起きているけれど、現実には、私たち人間がそれを必ずし



もすべて見ているわけではないということです。例えば鳥は常に鳴いていますが、それが聞こえるか聞こえないかはこちら（人間）のコンディションの問題です。人生におけるその時々起きる瞬間性というか、同期すること、チャンネルを合わせるということが大事だと思っています。撮りに行く対象や場所はある程度リサーチしますが、最終的に重要なのは行った時にいかに手放すか、ありのままを受け入れられるかということで、それが良い作品を撮れるかどうかの鍵かなと思います。

ブラジルにカトリックとサイコアクティブがミックスしたある宗教団体の教会があるのですが、非常に美しい音楽を演奏しています。彼らは、音楽を書くとか作曲するとかではなくて、音楽を「receive（＝受け取る）」するという言葉を使うのです。その考え方に私はすごく共感しました。アートは誰か天才アーティストが作るものではなくて、アーティストというのは常にあるものを、何か上から降ってくるものを受けとって、それを渡す人、つまり一つのメディアムなのではないかなと思います。

これを人間より大きなもの、神と呼ぶ人もいれば自然と呼ぶ人もいます。

今日の話はすべて、文化人類学のあり方とも関係してきますよね。

塚原：

今の話にはすごく共感します。自分たちの活動を振り返ると、同じことを自分たちは都市でやろうとしているのかなと感じました。僕たちの場合は、大阪の梅田や守口、京都などで自転車に乗ったり、夜中に歩いたりして、都市にある僕たちのスピリチュアルを編集／再編集、あるいはピックアップしている感覚です。

川瀬：

今日、文化人類学の研究動向は色々ありますが、映像が介在する研究には多くの可能性と問題があると考えています。僕は、論文を書いて書籍を出版し、映像を発表して終わりというのではなく、映像が、様々な場所にお

いて公開されることを通して喚起する議論も研究の対象として位置付けています。研究者は、制作した映像が巻き起こす議論に身を委ね、ダイブし、視聴者の様々な意見に向かいあう必要があると考えます。そこからまた新たな知の地平が切り開かれていくでしょう。

言葉以前の言葉「beyond text」という考えに繋がりますが、イメージや音も考え方によっては言葉だと思うし、映像作品だけでなくインスタレーション、パフォーマンスもある種のアカデミックな言語として捉えることができます。新しい表現の形態が日々切り開かれるなかで、それを学術の土俵の中でどう評価していくか、また大学教育の中でどう扱っていくかなど、未だはっきりと規定されていません。一方で、評価基準が確定されすぎることにも危険なこともかもしれませんね。イメージの創造という点から、我々は非常にエクスペリメンタルな時代の只中にいます。90年代からその萌芽はあったのですが、今世紀になり、より文化人類学とコンテンポラリーアートの技法をめぐる対話が促進され、理論的なレベル

の意見交換にとどまらず、具体的なものづくり、表現をめぐるジャムセッションが展開されはじめています。その中で京都市立芸術大学は人類学とアートの交差点としてカッティングエッジな議論の場を研究者やアーティストにどんどん提供してくれるものと期待しています。

このトークセッションの後には、ヴィンセント・ムーンが即興で映像素材を編集して上映する「Live Cinema」が行われました。本トークセッション中に、カイロでの体験について語ったのと同様、彼自身によって、西洋的な概念に基づく音楽、映像を超えた世界がそこには展開されていました。

2018年6月に予定している@KCUAでの展覧会では、ヴィンセント・ムーンは「Live Cinema」のように同じ瞬間が一つとしてない映像インスタレーションを、contact Gonzoは、パフォーマンスで意欲的な作品を発表し、それに加えて川瀬慈をディレクターとする公

開型のセミナーやワークショップを実施します。

また、この展覧会のリサーチプログラムとして、ほかにもいくつかのイベントを予定しています（下記参照）。どうぞご期待ください！

EXHIBITION

im/pulse: 拡張された領域における映像実験プロジェクト（仮題）
2018年6月2日(土) - 7月8日(日)

リサーチプログラム

- ・「デジタルメディア時代の人類学 ー映像で他者を想像するー」
2018年1月25日(木) 18:00-20:00
- ・contact Gonzo 映画作品『minima moralia』上映会
2018年3月21日(水・祝) 13:00 / 16:00 / 18:30
- ・「雲南からのイメージの創造 ー映像人類学研究を事例にー」
2018年3月22日(木) 16:30-19:30
(本プログラムのみ会場が@KCUAではなくMEDIA SHOP | galleryとなります)

REPORT @KCUA

京芸

transmit program

2017

京芸
transmit
program
2017
の後に

2017年4月、@KCUA開館当初から継続してきた企画枠をリニューアルし、京都市立芸術大学を卒業、あるいは大学院を修了してから3年以内の若手作家のうち、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトとして始動した「京芸transmit program」。2017年度の出展作家の「その後」の活動を紹介します。



迎英里子
Eriko Mukai



2017年7月に実施されたアートフェア「ART OSAKA」内にて、「京芸 transmit program: ART OSAKA version」として、個展「アプローチ7」を開催しました。

「京芸 transmit program 2017」の後の主な展覧会
京芸 transmit program: ART OSAKA version 迎英里子「アプローチ7」(2017年7月6日(金) - 8日(日) / ホテルグランヴィア大阪 / 大阪) | ALLNIGHT HAPS 2017 前期「日々のたくわえ」#3 迎英里子「アプローチ0.1」(2017年10月4日(水) - 11月3日(金・祝) / HAPSオフィス1F / 京都) | 不純物と免疫(2017年10月14日(土) - 11月26日(日) / トーキョーアーツアンドスペース本郷 / 東京 / 沖繩に巡回) | 「コンパスのコンパス」(2018年1月31日(水) - 2月11日(日) / Media Shop / 京都)



水谷昌人
Masato Mizutani



京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAの企画展、身体0ベース運用法「0 GYM」パーソナルトレーニング参加作家として、会期中に会場内での制作とトレーニングを行いました。※水谷のトレーニングの様子は前号のたねまきアクト03でもご覧いただけます。

「京芸 transmit program 2017」の後の主な展覧会
身体0ベース運用法「0 GYM」(2017年9月2日(土) - 10月15日(日) / 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA / 京都) | 青春画廊西陣オープン記念展「open house」(2017年12月16日(金) - 24日(日) / 青春画廊 - contemporary art house Nishijin - / 京都) | ARTISTS' FAIR KYOTO (2018年2月24日(土) - 25日(日) / 京都文化博物館 別館 / 京都)





矢野洋輔

Yosuke Yano



西太志

Taishi Nishi



「京芸 transmit program 2017」の後の主な展覧会

個展「石木水」(2017年8月8日(火)～8月13日(日))/同時代
ギャラリー/京都 | 「奈良・町屋の芸術祭 はならあと 2017」
(2017年10月25日(水)～29日(日))/菅瀬村今井 元タバコ屋、月桂
樹の家/奈良 | ARTISTS' FAIR KYOTO (2018年2月24日
(土)～25日(日))/京都文化博物館 別館/京都



「京芸 transmit program 2017」の後の主な展覧会

個展「指揮者：CONDUCTOR」(2017年8月26日(土)～
9月16日(土))/GALLERY ZERO /大阪 | 西太志+矢野洋輔展
「居心地の良さの棘」(2017年12月22日(金)～2018年1月15
日(月))/8/ART GALLERY / Tomio Koyama Gallery /東京

西太志+矢野洋輔 | 2017年12月から2018年1月、8/ ART GALLERY/ Tomio Koyama Gallery(渋谷ヒカリエ内、東京)にて二人展「居心地の良さの棘」が開催されました。



transmit program

2018

京芸
transmit
program
2018

第2弾となる2018年度は、熊野陽平（構想設計）、小林紗世子（日本画）、藤田紗衣（版画）、吉田桃子（油画）を出展作家を迎えます。時代を読み取ろうとする鋭敏な感性を持って、それぞれが選び出した表現の方法に真摯に向かい合う若き作家たちの試行と実践にご注目ください。



untitled) 2017 インクジェットプリント

藤田紗衣
Sae Fujita

藤田紗衣は、眼に映るものを違った形で再認識するための手段として版画の手法を用いて制作を続けています。ドローイングを拡大して版に落とし込み、その場で観ていたものと別の形で融合させるなど、「版」が可能にする解体と再構築を様々な形で試みます。

- 1992 京都市生まれ
2015 京都市立芸術大学美術学部版画専攻 卒業
ロイヤル・カレッジ・オブ・アート
(短期交換留学)
2017 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士
課程絵画専攻版画 修了

主な展覧会

- 2017 still moving 2017「フロアとストック」
(元崇仁小学校/京都)
2016 「Multiply: それぞれの地点より燦光する視点」(京都精華大学ギャラリーフーロー
/京都)
個展「Pinch In, Pinch Out」(gallery
make/京都)
「通りぬけフープ」(京都市立芸術大学ギャ
ラリー @KCUA /京都)
「still moving - on the terrace」(京
都市立芸術大学ギャラリー @KCUA /京都)
展覧会プログラム「架設 2015」第二期
「船語の検証」(京都精華大学/京都)
2015 「PORTO DI STAMPA」(アートゾーン神
楽岡/京都、B-gallery/東京)
ART OSAKA 2015「ARTで目覚める
vol. 3」(ホテルグランヴィア大阪/大阪)
「Thinking Print vol. 4」(京都嵯峨芸術
大学/京都)

吉田桃子

Momoko Yoshida

吉田桃子は、音楽を聴いているときの高揚感や、頭に浮かぶイメージを元にマケット（立体的スケッチ）を製作し、それらを動かした映像を木枠に張られていないキャンバスに描き出しています。図像の外へと垂れ下り、いく絵具は、それが絵でなく、下地であるキャンバスの布としての存在感をも強調するかのようでもあります。

- 1989 兵庫県生まれ
- 2014 京都市立芸術大学美術学部油画専攻 卒業
- 2016 京都市立芸術大学大学院美術研究科
修士課程絵画専攻油画 修了

主な展覧会

- 2017 個展「scene UKH ver. 3.1」（京都造形
芸術大学 ARTZONE / 京都）
個展「scene UKH ver. 3」（三菱一号館
美術館歴史資料室 / 東京）
個展「scene UKH ver. 2」（波さがし
てっから / 京都）
- 2016 アートアワードトーキョー丸の内 2016
（丸ビル マルキューブ / 東京）
個展「scene UKH」（galerie 16 / 京都）
「ウッホッホウホウホアートショー」（波
さがしてっから / 京都）
- 2015 神戸美術研究所アトリエ KAI OB 展「權
の会」（兵庫県立美術館王子分館 原田の
森ギャラリー / 兵庫）
「作品中！ 2015」（galerie 16 / 京都）



《scene UKH #8》2016 キャンバス、アクリル絵具

transmit program

小林紗世子は、日本画の画材である岩絵具と麻紙という素材の関係性と、それら自体の持つ力を保持しつつ「絵画」として成立させることを追求してきました。画面に現れた柔らかな色彩の奥には、要素を削ぎ落とすことで一回性を高めつつ、完成された絵画としての描かれた図像と残された麻紙の地との均衡を探る鋭い眼差しが潜んでいます。



《2016.10-2016.11》2016 木製パネル、麻紙、岩絵具の具、墨

小林紗世子

Sayoko Kobayashi

- 1989 埼玉県生まれ
 2012 京都市立芸術大学美術学部日本画専攻卒業
 2014 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻日本画 修了
 パリ国立美術高等学校（短期交換留学）
 2017 京都市立芸術大学大学院美術研究科博士（後期）課程日本画領域 修了
 神戸芸術工科大学アート・クラフト学科実習助手

主な展覧会

- 2017 青春画廊西陣オープン記念展「open house」（青春画廊 - contemporary art house Nishijin - /京都）
 神戸芸術工科大学アート・クラフト学科企画展（神戸芸術工科大学ギャラリー・セレンディップ/兵庫）
 第4回 続（しょく）「京都 日本画新展」（美術館「えき」KYOTO /京都）
 2016 碧い石見の芸術祭 2016「第1回石本正日本画大賞展」（三隅中央会館/島根）
 2014 第1回 続（しょく）「京都 日本画新展」（美術館「えき」KYOTO /京都）
 2013 Cumin Project 「Little Melodies」展（ホテルアンテルーム京都 GALLERY9.5 /京都）

- 1986 京都府生まれ
 2016 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士
 課程絵画専攻構想設計 修了

主な展覧会

- 2016 1floor2016「何かの奇遇」(神戸アートビ
 レッジセンター/兵庫)
 「みんな みにいく み・な・み・く エキ
 シプション」(ヒスロム作業場/京都)
 「Open Diagram」(元崇仁小学校/京都)
 2015 個展「廻り込める運命」(京都市立芸術大
 学小ギャラリー/京都)
 2014 個展「仮説的に、修復する 美術」(ASAIR
 /京都)



《左/右の目》2016

熊野陽平

Yohei Kumano

熊野陽平は、身近な出来事
 を題材に考案したゲームや
 インスタレーションを通し
 て、既存のルールや統一さ
 れた規格への違和感や、そ
 の境界線の曖昧さについて
 考察する作品を手がけてい
 ます。本展では「1/1ス
 ケール模型としての美術展
 示」というテーマに基づく
 「参加者」との対話をもその
 プロセスを含む作品①を
 発表します。

①ワークショップ「1/1ス
 ケール模型としての美術展
 示」について

テーマ「1/1スケール模型と
 しての美術展示」に基づいた
 〈物〉を提出していただき、展
 募締切後に提出物を会場に展
 示します。また会期中、会場
 にてワークショップ参加者
 による「read out」を行います。
 参加者がそれぞれテーマへの
 アプローチを発表し、意見交換
 を行います。

※募集期間・応募方法など詳
 細は京都市立芸術大学ギャラ
 リー @ O2 ウェブサイトに
 てし確認ください。

EXHIBITION

京芸 transmit program 2018

2018年4月7日(土) - 5月20日(日)

関連イベント

- ・ギャラリートーク
 2018年4月7日(土) 14:00-15:30
- ・オープニングレセプション
 2018年4月7日(土) 16:00-

SCHEDULE @KCUA [2017.12-2018.11]

4月 APR.

5月 MAY

6月 JUN.

7月 JUL.

8月 AUG.

9月 SEP.

4/7 (土) - 5/20 (日)

京芸 transmit program 2018

京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUA が一番注目するアーティストを紹介するプロジェクト。

第2弾となる本年度は、熊野陽平（構想設計）、小林紗世子（日本画）、藤田紗衣（版画）、吉田桃子（油画）の4名を選出。



吉田桃子「scene UKH ver. 2」展示風景

最新情報は @KCUA ウェブサイトにて
ご確認ください

6/2 (土) - 7/8 (日)

im/pulse: 拡張された領域における 映像実験プロジェクト (仮題)

「感覚民族誌」的観点からみて優れたアプローチをとる実践や、身体深部の感覚や感性の作用を問う表現に着目。世界各地を旅しながら映像作品を制作するフランス出身の映像作家ヴィンセント・ムーン、パフォーマンス・映像・写真など発表形態を固定しない活動で高い評価を得る contact Gonzo が出展。また、映像人類学者の川瀬慈をディレクターとする公開型のセミナーやワークショップを実施。



ヴィンセント・ムーン
Photo by Anna Zelikova

7/21 (土) - 8/19 (日)

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展 移ろう足音を探して—

田村友一郎がたどる、明治から続く道 (仮題)

明治時代から現在に至るまでの京都の街について、本学が創立以降迎ってきた道筋を手掛かりとしながら、美術家の田村友一郎と共に調査・研究を行い、一つの展覧会を作り上げていく。京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品のうち、明治期に制作された卒業生の作品、京都府画学校以降の校歴資料などを用いた新作インスタレーションを発表予定。

8/25 (土) - 9/2 (日)

つながる糸 ひろがる布 —三大学染織専攻学生選抜展—

8/25 (土) - 9/2 (日)

大谷史乃・長町那美・前田菜月 (タイトル)



9/15 (土) - 10/28 (日)

クリスチャン・ヤンコ

既存の社会構造やアートシーン作風で知られるクリスチャンゲン、ドイツ生まれを招き、など、アートの世界とそれとやそれぞれのあり方を問うか芸術の外の世界に橋渡しをす

10月 OCT.

11月 NOV.

12月 DEC.

1月 JAN.

2月 FEB.

3月 MAR.

11/10 (土) - 11/25 (日)

秋山陽 (本学美術学部陶磁器専攻教授)

退任記念展

タイトル未定)



クリスチャン・ヤンコフスキー
「Walking Logic」展示風景
Photo by Adam Sakovy

8 (日)

ヤンコフスキー 個展(タイトル未定)

アートシーンを批判する挑発的でアイロニカルなクリスチャン・ヤンコフスキー (1968年Getty Center) を招聘。スポーツ、宗教、マス・メディアとそれとは異なる世界とを接続し、その関係性を問いかけるような作品を通じて、現代芸術と向き合う彼の活動を個展形式で紹介する。

11/29 (木) - 12/9 (日)

京都市立芸術大学

第29回 留学生展

12/1 (土) - 12/9 (日) (仮)

いわゆるかまがさき 一所謂釜ヶ崎一

出展作家: オギハラフウカ、島村鼓

12/15 (土) - 12/24 (月・休) (仮)

Partition——パーティション

出展作家: バロタン・ガブリエ、松延総司、山角洋平、バンジャマン・ラフォーールとセバスチャン・マルティネス=バラほか

12/15 (土) - 12/24 (月・休) (仮)

松井沙都子「ミニマル・ハウス」

2018/1/12 (土) - 2/11 (月・祝)

「状況のアーキテチャー」 関連展示 (タイトル未定)

物質・生命・社会の3つのテーマが星座のように多角的に結びつく新しい展示と多感覚的な鑑賞と参加の方法を建築家と共に共同作業で作る。これらの制作プロセス自体が、開かれたアートの可能性を問直す「状況のアーキテチャー」となることを目指す。



(参考) 2017年度事業の様子

3/9 (土) - 3/24 (日)

出原司 (本学美術学部

版画専攻教授)

退任記念展

2/16 (土) - 3/3 (日)

京都市立芸術大学美術学部

同窓会展 (タイトル未定)

2/16 (土) - 3/3 (日)

前田耕平

「パンガシアノドン ギガス」(仮題)

屈折考

永守伸年

最近はしゃがみこむことについて考えている。これがけっこう奥が深いような気がする。

たとえば、しゃがみこむイエスを想像できるだろうか。すくくと背をのぼすイエスになじむものの意表をつくこの姿勢は、ヨハネの福音書の8章に記されている。姦通の罪を犯した女が石を投げられいたぶられる場面。イエスは群衆を制して立ちはだかるわけではない。「イエスは身をかがめて、指で地面に何か書いておられた」。まわりがやかましいので説教をするだけで、「また身をかがめて、地面にものを書きつづけられた」。いったい何を書いているのか。なぜ書いているのか。どんな研究にもそれらしい注釈はない。女がむざんに殺されかかっている、その傍らで、しゃがみこみ指でものを書きつづける。しかしこの奇妙なふるまいに、イエスの天性の孤独があらわれているように思えてならない。

スイスの作家、ロベルト・ヴァルザーの晩年もうつむき加減に過ぎていった。こちらはしゃがみこむというより、かがみこむと言うべきか。ものを書くほかとくにやることもなかったヴァルザーは、老境にさしかかって独自の執筆スタイルをみだした。ちびた鉛筆、それも、おそらくは濃ゆくてやわらかいやつで、紙片に豆粒ほどのアルファベットをひとり書き散らす。誰に読ませるつもりもなかったはずのその紙片は、のちに忠実な研究者たちによって解読され、ミクログラムとして出版された。それを読むことはかがみこむことの意味を探ることもある。思考をすばやく文字に伝えるための姿勢。首をひっこめ水面ぎりぎり呼吸するための姿勢。そこから小説『盗賊』の、チャーミングな冒頭が生まれてくる。

「エーディットは彼女を愛しています。でも、詳細は後ほど」

サン・ピエール島に残されたルソーの書齋も、ヴァルザーと同じくちんまりとしたものだった。栄光をきわめ、まもなく追放されたルソーはピエーヌ湖上の孤島に流された。『孤独な散歩者の夢想』の5章では、この島の植物採集が「本当の安らぎ」を与えたことが回想される。し

かし読みすすめていくと、ここでもなお、かれを苦しめた分類の衝動がやまなかったことがわかる。「一本の草の硬毛も、どんなに小さな植物でも、細かに記さないではいられなかった」。「ウツホグサの二本に分かれた長い雄しべ」、「イラクサやヒカゲミズの雄しべにある弾力性」、「ハウセンカの実やツゲの莨の破裂」。ルソーのつくった植物標本の写真をながめながら、膝をついて草花を手折るグロテスクな中年男を思い浮かべる。

90歳の祖母は、ルソー以上の年月をかけて田畑の草を抜いてきた。ナス、トマト、ピーマン、キュウリ、大豆、空豆、インゲン豆を収穫してきた。いま、病気が進行していると聞いて祖母をたずねると、咳が出ないよう、膝をかかえ座椅子に座って迎えてくれる。とりとめのない昔話を耳をかたむけていると眠くなり、目をさますと、記憶にある姿勢よりもやや猫背の横座りで祖母は洗濯物をたたんでいる。久しぶりにあつまった5人の孫の洗濯物をたたんでいる。テレビをつけっぱなしにして、芸能人が死んだりすると涙ぐむのだった。子供のころ、この田舎の家を訪れて喘息の発作を起こしたとき、柔らかな洗濯物の山に首をつっこんでうずくまり、そのにおいに

安心したことを覚えている。

こんなことを考えるのにはきっかけがある。ただでさえ腰をかがめて仕事に打ちこむひとによく出くわす芸術大学の、分岐して延びる道を歩いているときだった。校舎に向かい右手に折れる、石の小径に巻かれるようにして茂る葉むらの根元に、思いがけずどんぐりを見つけた。一個ではない。大きさと、たぶん色あいも周到に揃えられたどんぐりが、ピラミッド状に積み重ねられている。わずか半年のあいだ同じものを構内で三つ見つけた。注意すれば目にとまりそうな、手を伸ばしたくなりそうな低い位置に、四段組みでつやつや光っている。そのたびに枝葉をかきわけしゃがみこみ、この小憎らしい、どんぐりのたくらみの犯人の前かがみを想像してみる。そしてしゃがみこむことについて考える。

永守伸年 Nobutoshi Nagamori

1984年生まれ。京都市立芸術大学講師。

京都大学大学院文学研究科にて倫理学を専修し、2015年、同研究科で学位を取得（博士（文学））。日本学術振興会特別研究員を経て、2016年より現職。専門は、カント哲学、現代倫理学。主な論文に「信頼概念の射程：自律概念の再検討を通じて」（『倫理学年報』62号、2013年）など。著書に「感情主義と理性主義」（『モラルサイコロジー：心と行動から探る倫理学』太田祐史（編）春秋社 pp. 187-218）がある。

STUDIO VISIT @KCUA



vol. 4 西太志 | 南区久世のスタジオ

@KCUAが様々なアーティストのスタジオを訪問し、作品とそれが生まれる場所についての関係にせまるコーナー「STUDIO VISIT @KCUA」。第4回目は、「京芸 transmit program 2017」でも紹介した83年生まれの若手ペインター、西太志さんのスタジオを訪ねました。制作スペースとビューイングスペースを有する一風変わった建物構造です。

Interview by Mizuho Fujita



引き継がれていく建物

このスタジオを借りたのは、いまから6年くらい前、まだ京都市立芸術大学の大学院に入る前で、学部を卒業して別の仕事をしながら制作をしていた頃のことです。母屋に物置場がついているという物件で、物置場の方をアトリエにしたくてここに決めました。

築何年かわからないほど古いんですが、多分50年くらいかなと思います。僕が入る前には電気屋さんが、さらにその前には日本画家が借りていたそうです。それ以前はもしかしたら誰かが普通に住んでいたかもしれない

ですね。大学院に在籍していた頃は、このスペースは作品を置いたり倉庫として使っていました。そのうち、一部屋をアーティストである友人のヒョンギョンに貸すことになって、彼女は大学院の博士課程を修了してからNYへ行くまでここに住んでいました。もともとここは土壁だったのですが、大家さんの了承を得てヒョンギョンが色を塗り換えたんです。彼女が京都を出てからも、僕がそのままの状態使っています。

このスタジオを借り始めた当時は京芸に入る前で仕事をしながらでした。壁も床もなく、

鉄骨だけの状態だったんですけど自分で手を入れてスタジオとして使えるように改装しました。仕事をしている時はあまり制作にあてる時間ありませんでしたが、東日本大震災の年にその仕事を辞めてからは、制作に集中できるようになりました。

学部を卒業したのが2006年なので、そこから5年ほど仕事をしていたことになりますね。仕事を辞めたすぐ後の1年ぐらはこのスタジオにこもって絵を描いたり、映画を見たりして過ごしました。



自分は何がしたいのか、何が描きたいのかと悩みながら制作していた時期でもあったので、小さな絵でも、すごく時間をかけて描いたりしていました。

環境を変化させること

仕事を辞めてすぐの頃は、大学院に進学しようとは考えていませんでした。しばらくして、ただ一人で制作していても公募展に出す気もないし、発表の機会がありませんでした。何か刺激が欲しいと思うようになりました。そこで京都市立芸術大学の大学院への進学を選んだのは、同年代で作家活動を続けている人に、京都芸大出身者が多いなと思っていて、それがなぜなのかを自分で確かめたくなったからです。でもまあ、入ってみたらわ

りとほったらかしやねんな〜って思いましたけど(笑)。

卒業後に制作場所がなくて困る人が結構多いので、この物件は大学院にいる間もずっとキープしていました。普段は大学で制作して、夏休みや年末年始など大学が使えない時にはこのスタジオで、という感じで使い分けていました。

真夜中と孤独と作品と

自分は孤独な中で、しかも特に夜中に制作するのが好きなので、アトリエに来て活動するのはほとんど夜ばかり。修了してからの方が、自分のやりたいことをよりダイ





レクトに作品に表したいという欲求が強くなってきているように感じます。大学院在籍時は、制作中に他者からの視線を意識することが大きかったのですが、こうやって一人でスタジオにこもって制作していると、自分がやりたいことや自分が見たい風景そのものに意識を集中させることができます。その上で、展覧会として作品を発表したとき、どう見られるかということ意識するようになりました。

描く時間が違うと、画材も書き方も違う

先ほどお話ししたように、大学院に入る前は、1枚の絵に2~3ヶ月くらいかけていたのですが、京都芸大にはスピード重視でとにかく速く、どんどん次に描くという風潮があ

りました。それは自分にとって非常に刺激的で、良い変化をもたらしてくれました。そのおかげか、今は、仕事をしながら制作時間をコントロールできるようになっています。素材の面でもいい変化がありました。元々紙に透明水彩で描いていたのが、キャンバスに変わって、画材も、油やアルキド樹脂、木炭などなどいろいろ試すようになりました。

大学院1年の頃は、画面になるべく近寄って、細い面相筆を使い、画面の矩形の中で絵の世界を構築させようとしていました。ですが今は画面の端を描かなくなったり、キャンバスを床に置いて展示をしたり、絵の世界が現実や他の作品に拡張、影響していくような感覚に変化していきました。スタジオの大きさによっても描く絵の大きさもかなり左右されるのですが、transmit programで発表したような大作以上の作品も描きたいという欲求があります。ただ最近では、油絵具の強さにもひかれていて、小さな作品でも今の仕事とまた違った作品が生み出せるのではないかと模索中です。

西太志 Taishi Nishi

1983年大阪府生まれ、2006年大阪芸術大学芸術学部美術学科絵画コース卒業、2015年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了。琳派400年記念新鋭選抜展 - 琳派 FOREVER - (2016年、京都府京都文化博物館 / 京都) や、ART OSAKA 2015 (アートで目覚める vol. 3) (2016年、ホテルグランヴィア大阪 / 大阪) など関西を中心に絵画を発表している。アートアワードトーキョー丸の内2015 (丸ビル / 東京) でグランプリを受賞。「京芸 transmit program 2017」(2017年、京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA) 出展作家。



京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

@KCUA



京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
〒604-0052 京都市中京区押小路町238-1
地下鉄「二条城前」駅（2番出口）南東へ徒歩約3分
「堀川御池」バス停下車すぐ
TEL: 075-253-1509
<http://gallery.kcuu.ac.jp>

編集：西谷枝里子（リレーリレー）、藤田瑞穂、西尾咲子、永田隼里
デザイン：仲村健太郎
発行：2018年3月20日
© 2018 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

